女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百七拾壹號

當府内無郵税
一冊六錢

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 171. JULY 20TH, 1889.

EDITORIAL:—Consecration. No. III.

LEADING ARTICLES:— The Mutual Rights of Husband and Wife in Civil Law and in Other Respects. by Mr. E. Ueki.

CRITICAL NOTES: —"Otome-Kokoro."

MISCELLANEOUS:— "Let us Go Forth to Battle." "The Young Gentlemen." "Zeal and Indifference." "The Magical Power of Words Spoken and Written." "The Position of Women in Our Country."

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

第百七十一號目錄

社説　犧牲獻身

論説　民法上及び其他に於ける夫婦の權利（植木枝盛）

批評　新著百種第三號の評（藤の屋主人）

雜錄　率ざ出でゝ戰わん○若殿原○慷慨さ冷々○末松文學博士に參らす○言語文章の魔力○鹿鳴館、紅葉館○女子の邦國に於ける地位○茶話三○月に歎ず

兒籃　兵士の宥罪（しきたへ）

史傳　一仁人の傳を讀みて感じつる儘

小説　酒鬼（藤菴主人）

寄書　ラムエル王の詩（徹石生）○法理上父母の許諾は婚姻の必要條件なり（秋洲健二郎）

新報　喜びて正誤す○宮城正門外の銅像○監獄則○新平民○一夫一婦○青山を見るの詩○熱窓下亦有樂○耶蘇教徒を憫れむ○眞實、眞實○西洋婦人無禮多し○ヘース夫人長逝す

片々　アバルヂーン夫人○女の惡黨○外十一件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *Mr. Alfred East who has lately arrived to study Japanese art, has just delivered an address to "The Meiji Art Association," on Jap. Art. Among many excellent points that he made was this, that Japan whose pictorial art is small in great things and great in small things had not yet influenced European art although it had to some degree influenced its decoration.*

(2) *Mrs. Swift, the wife of the American minister has employed a lady by the name of Yuki Kurabayashi for the purpose of studying Japanese etiquette.*

(3) *The noble families have been specially encouraged to send the daughters to the Peers' School. The five daughters of the Ex-Shōgun Tokugawa have lately come up to Tokyo for entering it.*

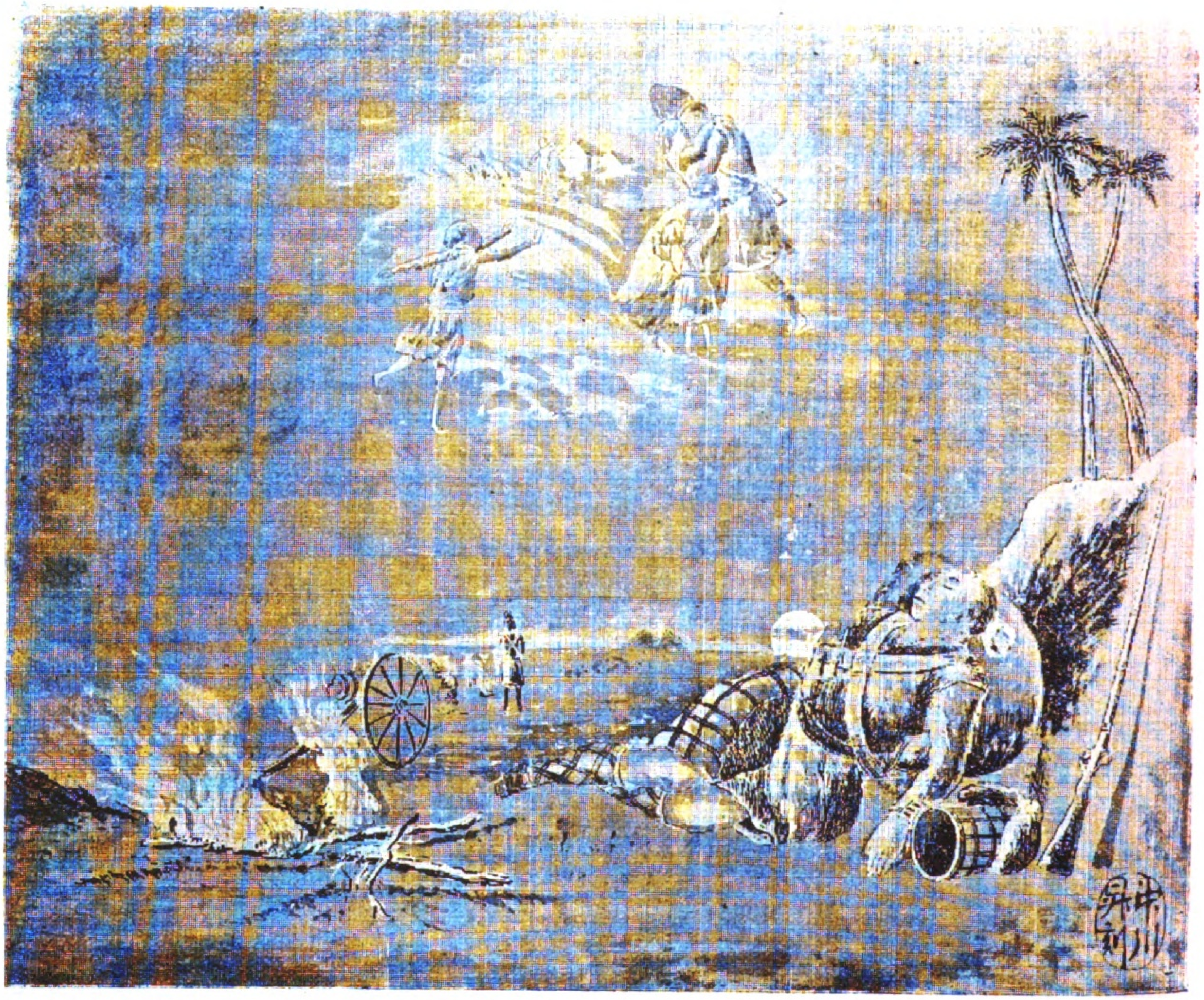
(4) *The schools for nuns and priests previously mentioned are to be built in Kyoto, Tokyo and in the following five prefectures: Fukuoka, Yamaguchi, Nagano, Aichi and Miyagi.*

(5) *The Instructions in regard to less rigorous treatment of the prisoners have just been sent out.*

(6) *The Lace Manufactory of Tokyo has recieved orders from England and France to make twelve kinds of hem lace from 3.50 to 5 yen per yard.*

Digitized by Google   Original from COLUMBIA UNIVERSITY

雜錄第一篇之圖



Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百七十一號

明治二十二年七月二十日發兌

社説

○犠牲獻身

四。文明は貞操を殺ろす

大和魂しひは男子の專有物に非ず、其の男に在つて凝つて神洲の正氣となれる如く、女に在つては結んで貞烈の操ほとなれり、其氣純潔、其力鋭利、發して楠母の訓戒となり、鬱して靜女の悲歌となり、激して、細川夫人の短劍となり、慷慨して降る雨りかの血涙となる。男子もし武士の魂しひを以て誇らば、女子は此の貞女烈婦人を以て誇らん、嗚呼神洲の粹高まりて富士山となり、低まりて琵琶湖となれるか、即はち亦た若く陽發して男子的大丈夫となり、陰藏して女性的烈婦人となれり。

然るに或人は惻然として歎くなり、吾人其聲の甚はだ悲しきに、耳を敲てゝ聞けば、彼れ愁焉又怫焉として云く、大日本の婦女子は實に其の如くに立派なりし、然れども西洋の風吹入りて輕薄なる男女同權論の行はれ來りしより、此の美なる女徳は俄然として壞れ、今まや日本女子に昔日の如く、執着、熱着、清烈、貞操なるものあるなし、彼等は徒らに驕慢なる西洋婦人の惡習を嘗め、妄りに男子を奴隷視するの歐米風に得意し、勝手我儘に男女同權論を主張して、頗ぶる誇れる色あり、故に今日に於ては最早彼の優貞にして強く、温愛にして切に、所云る良人を天の如くに尊敬して滿情滿胸只管らに之を思ひ慕ひたる如き佳人あるなし、若し之を文明の常例なりと云はゞ文明なるものは即はち女徳を破ぶるもの也、誰か往昔の美なる日本婦人を喜ばざるあるや、天下何の處ろに行くとも彼が如き貞操女徳は甚はだ少かりしならん、而して今まや日進の文明なるものは實に之を破ぶり去れり、文明は實に之を破ぶりつゝ日進して更にいよ〳〵之を滅し去んとす、嗚呼もし文明の來る之を防ぎがたしとせば乞ふ只だ之が風をして日本女性に吹當らしむる勿れ、日本婦人は箱戸閨房にありし昔しこそ反つて床しけれ、女大學教育の時代こそ反つて美しかりつれ、今日の如くにして進まば女徳の敗頽夫れ果た如何ならんかと。其聲眞とに悲し、其語眞に悲し、其言ふ所ろ亦眞とに悲し。

然れども吾人は此の如く悲しまざるを得ざるの時代に到着したるを天に感謝す、日本婦人は能くも幸はひにして此の一歎

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

息を要するの時代に迄で進歩したる哉、吾人大ひに之を祝賀し、切に之を恭謝せざる可らず。

抑そも何の故に此の悲しきを聞きて反つて之れを喜びとなすか、吾人豈に奇言を好みて人を驚かすとを爲んや、實に衷心より之を祝せざるを得ざる也。 見よ、男子の大和魂しひは昔日に比較して果して增加したりや、若くは減却したりや、今ま假りに之を增加したり減却したりと評定するとを爲ず、先づ抑そも昔日に於て謂つて丈夫の大和魂しひと爲したるものは果して今日尙ほ盛大なりや否やと問わん、君の御名折と聞き直ちに割腹するもの今ま何處にありや、譜代恩顧の御報ひ此時なりとて、猪進猛進して君が陣頭馬前に打死するもの今ま何處にありや、少さかの言掛りに武士道相立たずとして拔刀突入直ちに果し合ひを爲すの氣象今ま何處にありや、君主の御身代り躬の御用に達つを冥加至極と存じ愛子の首べを切つて強て莞爾たるもの今ま果して何處にありや、空腹乾くが如く大小の目方尙ほ重きを覺ゆるとき食はずと云へども高揚枝するところ此れ武士なりとするの不攝生家今ま何處にありや。 吾人は昔しに於て彼等をして如此く爲さしめし所ろの精神今まは悉とく消失せりと云はず、然れども彼等をして如此く爲さしめし所ろの行狀に至りては今や殆んど皆無なりと云はざる可らず。故に若し如此き行狀を以て男子の正銘なる大和魂しひなりとせば、此の大和魂しひなるものは今まや既に全く滅盡し去れり。 然れども今日何人か之に憂ひて悲泣するものあらん、何人か之を復古して天下を昔しの切腹割腹時代の武らひ天下と爲さんとを欲するものあらんや。 而して只だ女性に就てのみ昔日の如き大和魂しひあれと云ふは果して可なるか、男子は最早昔しの禮服を脫ぎ去りたり、獨り女子にのみ昔日の如き服裝を常までも爲せよと云ふ乎、女子何の因果ありて獨り此の不幸に出遭ふ。

吾人は忠義なるものを喜ばざるにあらず、忠義は實に此れ人情の至淸なるもの也、其の或る君主に對して最熱極熱の奉公心を發すると、亦た是れ人間眞正の情の變長したるもの也、其の質や宜し、其の望みや宜し、敢て一點の不潔を混合する所ろのものにあらざる也、然りと云へども同類たる人間に向ひての最大なる忠義心は、人類としての吾等の最高なる獨立心と調和するものにあらず、吾人は君主の愛に服す、亦君主の權力に服す、然りと云へども殿樣彼自身に對しては吾人何の逆ふ所ろも亦何の服する所ろもあらず、即はち人類として

渾然同一の地位に立つものなり、此時に於て吾れ豈に昔しの武士の如き、割腹切腹的の如き、上下大小的の如き忠義心あらんや、吾は忠臣ならんよりも良臣たらんとす、何物とならんよりも人間たらんとす、故に人間として君に忠仕もすべし、屈服もすべし、奴隷ともなるべし、然れども吾は常に吾也。果して然らば昔し風の忠臣の滅却したる如く、亦昔し風の貞女の滅却し行くと自然の當數にあらずや、男子が今の如く個々人主義となり、獨立的となり、自治自主的となり行くは必らずや文明の餘澤なるべし、如此く女子も亦た男子より離れたる一個人となり、女子として獨立するの獨立人となり、女子として自主自治するの一人間となり、彼のリードルの犬が主人に忠義ありしが如く良人に忠義なりしの昔しを棄つるとは、豈亦た同一の文明餘澤にあらずや。男子は殿様より離れて一個人とあれり、然れども女子は決して男子を殿様とするとを廢する勿れ、男子は卑屈心を止めて宜しく獨立心を養ふべし、然れども女子は決して男子外に獨立するの暴叛心を養ふ勿れ、男子は常に一個人たれ、然れども女子は永久に副使となり影坊子となれと言ふものあらば何如ん。

天は人の上に人を置かず、亦た人の下に人を置かず、惣べて一齊列して天の下に並立す、之を以て吾人は男子に昔日の如き忠義の漸やく滅して大ひに獨立心の發輝したるを喜こぶ、而して今まや女子中にも亦た昔日の如き貞操の漸やく滅して將に眞正なる獨立的女德の發達せんとするを見る、豈安んぞ之を大祝賀大感謝せざる可けんや。

五　開化は忠義を滅す

女子が一圖に思ひ凝み、良人を天の如く神の如くに信奉するの貞操すでに死せり、吾人之を祝せり、而して吾人は只だ祝するのみにて夫にて滿足なりや。

蓋し昔日の忠義貞操は迚も眞正の人權說と調和するものにあらず、亦た眞正々當なる人情の至愛至望と調和するものにあらず、故に到底何の日にか至りて必らず相ひ矛盾し全く分離せざる可らざるもの也。然れども眞神を崇拜するの天性一變して或は偶像に禮拜し、或は英雄人類に崇拜するとゝなりて、其の大ひに誤まりたるの迷信あるは反つて是れ大眞の人情確存して滅せざるとを證するが如く、彼の武士が殿様の爲に死し、貞女が良人の爲に奴隷となるの人情は、亦此れ人間至眞なる天情の一變發したるとを證する也。　蓋し其の發するや其の發すべきの處ろを誤まりたり、然れども實に只だ其

の天性自然なる人情を抽發したり、即はち彼が献身犠牲的の至情を抽發したり、彼が抑へんとして抑ゆ可らず、現はさゝらんとして現はさゝるを得ざるの極情を抽發したる也。

此を以て男子の忠義心は今まや其元形を變じ、即はち其形ちを變じて其の天眞に反へり、最早人間と云へる同一類の人間彼自らの上に忠義なるにあらず、更に一層の高等ある、更に別種の無形的なる、或は上帝と云ひ、大道と云ひ、眞理と云ひ、自由と云ひ、愛と云へるが如き者の上に忠義となりたり、故に其の偶ま亦た人間たるものゝ上に均しく忠義なるの現象ありと云へども、今は最早此の人間の上に人間としての忠義を寄するにあらず、實に彼が一種高等なる彼の大無形物を懐抱するが故に由るなり、吾人豈にキリストを拜せんや只だキリストの中に存するものを拜するあり、如此く今の人間に忠あるものは決して只だ其人間に忠なるにあらず、更に別に存する所ろのものあるに由る。

嗚呼男子は其の犠牲献身的の天性によりて變發したる昔しの忠義を止め、更らに其の犠牲献身的の至情に相應すべき他の新崇拜物を覔め得たり、故に彼等は今の如く獨立に熱心し、自治に熱心し、而して亦た大道に熱心せり、彼が至情を寄するの前鴻早く失せたりと云へども後鴻すでに現はれたり、彼は最早理想なきにあらず、疑思する所ろなきにあらず、熱望する所ろなきにあらず、献身犠牲すべき所ろなきにあらず、即はち彼はすでに其の本然に復したり。而して女子は未だ其の安んずる所ろを得ざるものにあらずや。

六　貞操を失ひし新婦人

人の至情は總べて身を献げ他の爲に犠牲たらんと欲するもの也、其望み偶たま外慾肉情の爲に蔽はるゝヿありと云へども、然れども其の天眞の至情に至りては必らずや献身犠牲たらんヿを欲せざる者なし、而して其の欲するヿの尤も強きものは女性あり、而して女性中の此情に更に尤も強きものは實に日本の婦女子にてあるあり。日本の婦女子は特にデボーショナルなりと言はれたり、其執着、熱着の情萬國に秀でゝ特に熱烈なりと言はれたり、然るに彼等が昔し思ひを凝めたる所天は實に天にあらで、所云る昔日に於けるの彼等が貞操は誤まりなりしと分りぬ。左れば彼等は之より何如なる方向に向つて其尤も熱烈ある至情を寄せんや。凡そ女子の情は平常極めて動き易し、而して其動き易くして動くの間だは彼の尤も不平なる時也、但だ夫れ一旦大

定するや心情靈能悉く一凝結す、此時に至れば如何なる破城槌も最早之を破ぶると能わざるべし、而して其の動かざる如此きに至りて彼れは初めて平和あるもの也。此故に舊時代の貞德を棄てゝ未だ新時代の貞德に移らず、所云る彼が有明に於ての月すでに落入りて未だ今朝の大陽を見ず、其の凝望し結念する所ろの目的確定せざるに於ては、彼が心裏は不平不安定なり、彼が女德は不安定不確實也、如此ならば彼が國家に對するの効德も亦た實に輕少ならざる可らず。

七　新日本の貞女烈婦人

然らば新時代の婦人は抑そも如何にすべき乎、舊日本の貞女烈婦人すでに賴む可らず、新日本の貞女烈夫人あるものは果して如何なる女性なるぞ、云く彼れ宜しく其良人を天の如く見做さゞる可し、即わち之を同輩同人間として尊重すべし、彼れ宜しく其の良人を旦那の如く見做さゞる可し、即わち之を同作同運命の朋友として敬愛すべし、彼が熱愛を以て良人を愛すると固より可なり、可なるのみにあらず當に必らずや然るべし、然れども其の愛するは之を同人間たるの良人とし終生の最愛者として愛すべし、若し之が爲に生ちを棄つるとあらば彼の犬の如き忠義ならず寧ろ友人の爲に命を棄つるもの、如くなるべし、若し之を尊崇するとあらば只其良人あるが故にあらず善なる良人なるが故に尊崇するにてあるべし、女性の優雅溫愛なるは其の最美德、其の最善粹なり、然りと云へども只だ優雅溫愛あらんが爲めに大道を苟くも曲ぐる勿れ、吾人は奴隷的の烈女を望まずして獨立的の佳人を望み、家來的の貞女を望まずして同朋的の賢妻を望む、向來今後の貞操は須らく自主自由と並行すべし、平民的と同行すべし、人權同權論と伴行すべし、願わくは神洲の女粹凝つて更らに一新形となり、能く女大學、閨門、短刀、忍屈の舊衣裳を棄て、正さに文明の新衣裳を着けて、彼の同等的、獨立的、平民的の貞女烈夫人と爲らんとぞ。

論説

○民法上及び其他に於ける夫婦の權利

植木枝盛

英人彌兒氏嘗て慨然として論じて曰く「女子は廢人及び幼兒と同視せらるゝ者あり、唯り夫たる者は其婦の財産及び身躰の上に就き無限の權力を保持し居れりと、佛國アコラス先生も亦拿破崙法律(即佛國法典)を駁して云ふ「我婚姻の制は婦

人を束縛撿制して邈然之を蔑視し、或は之を視ると賤婢の如く、或れ之を視ると幼者の如く、或は之を貶黜して幾んど物類の如く看做し、或は公力を以て強て其夫と同居せしめ、或れ又其婦の財產を拘制して之を直接若くは間接に夫の掌中に移し、或は民事上夫婦間貞節の義務をして同等なると能はざらしめ、或は生子養育の權を其婦より剝奪して單り其夫の一手裏に歸せしむ、誠に公平なる者と謂はんと欲するとも得べけんや」と。

蓋し英佛等の諸國に在りては今猶ほ東洋諸國などの如く一家の交際に於ても社會の交際に於ても男尊女卑の風習汪然として行はるゝものにあらず、是れ能く人の知る所なり、而して唯だ其法律（殊に民法）の上に於ては猶ほ彼の古昔の未開なる時代に胎出したる

妻は自己主人たる者に非らず、而して其夫の權力の裏に在る者なり

婦に屬する一切の者は其夫に屬す

なんど云る謬妄悖理の成言を其血分子と爲すにあらざる耶、縦ひ好んで斯の如く爲すに非ずとするも其血分子は自ら猶ほ其間に存するにあらざる耶、左ればなり、或は妻を以て賤婢の如く看做し、或は之を以て物品の如く看做し、或は幼者視し、或は廢人視し、或れ契約を結ぶの堪能なき者と爲し、或は訴訟を起すの自主なき者と爲す、寧ろ將た異むとを須ひんや、

看よ彼の佛國民法の如きは其第一千一百二十四條に記載するに乃ち左の如きものを以てするに非らずや、

契約を結ぶとを得ざる者は

幼者

治產の禁を受けし者

別段法律上に定めたる場合に於ては婚姻を結びたる婦人

其他總て法律上にて或る契約を結ぶ可らざる禁を受し者

是豈に婦を以て契約を結の堪能に缺くる所ある者と爲し、幾んど幼者の如くに看做し、廢人の如くに看做す者に非ずや、又其の佛國民法は身分證書調製の證人と爲り、若くは後見人と爲り、若くは親族會議に與かるの權利に就きて、如何なるとを記載しあるか、其の第三十七條には之を曰く

身上證書の證人は本人の血族たると否とを問はず二十一歲以上の男子に限るべし但し其證人は本人の擇に任かすべし

と、其の第四百四條には之を曰く

左の數人は後見人又は親族會議の員中に加はるとを得ず

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

第一　父母を除く外の幼者
第二　治産の禁を受けし者
第三　母及び尊族の親に非ざる女
第四　幼者の身分幼者の家産又は幼者の財産の多分に付き自から幼者に對し訴訟を爲す者及び其父母幼者に對し同上の訴訟を爲す者

是れ即ち婦人に奪ふに身上證書の證人たるの權、後見人と爲るの權、親族會議に與かるの權を以てするものに非ざるか。若夫れ夫婦の財産に就いては如何、佛國民法は先づ其一千四百條に於て

夫婦財産共通の法を用ひ婚姻を結ぶべきとを述べたる時又は別段契約の有らざる時は後の六款に記する規則に從ひ財産を共通すべし

との一規則を立て、而して其の第四百二十一條には則曰く

夫は一人にて共通の財産を支配すべし
夫は其婦の承諾を得ずして共通の財産を賣拂ひ又は書入質と爲すとを得べし

と其の第一千四百二十八條には則曰く

夫は婦の一身に屬する財産の全部を支配するの權あり
夫は其婦に屬する動産に就きての訴訟及び不動産占有の權に就きての訴訟を總べて一人にて爲すとを得べし（下略）

と、其第一千五百四十九條には曰く

夫婦たる時間は夫一人にて嫁資の財産を支配するの權あり、夫は其婦に嫁資を與ふべき者又は其嫁資の財産を占有する者に對して訴訟を爲し又は嫁資の財産の利益を收受し及び嫁資の金高を償還せしむるの權あり（下略）

と、其第一千五百三十一條には曰く

夫は其婦の動産及び不動産を支配し、且つ其婦の嫁資として持來りし動産又は結緣間其婦の贈遺及び遺物相續に因り人より得る所の動産を巳れに收受するの權あり

と、蓋し財産の上に於て婦權の強大なると概ね斯の如し、婦權を定むるに至つては則曰く「何れの場合に於ても如何なる契約あるを問ず、婦は其夫の許諾を得ずして其不動産を人に賣拂ふとを得ず、夫其事を肯ぜざるときは裁判所の允許を得たる上に非れば其不動産を賣拂ふとを得ず（第千五百三十八條）と、或は曰く「夫婦結緣の間は婦新に其財産を嫁資と爲すべからず、又豫め嫁資と爲したる財産の價を増すべからず（第千五百四十三條）と、夫權と婦權との相均等せざると何んぞ其の甚

しきや、乃ち彌兒氏をして夙に女權の宣揚せざるを慨憤して女子は廢人及び幼兒と同視せらるゝ者なり、唯り夫たる者は其婦の財産及び身躰の上に就き無限の權力を保持し居れりと絶叫せしめ、アコラス先生をして大に拿破崙法律を排して、我婚姻の制は婦人を束縛撿制して遡然之を蔑視し、或は之を視ると賤婢の如く、或は之を視ると幼者の如く…………………誠に公平なる者と謂はんと欲するも得べけんやと剴論せしめたる者抑も亦宜べならずや、

茲に又訴訟の權利に就きて少しく觀察する所あらん、夫たる者は其婦を措きて自由に訴訟を爲すを得るにも拘はらず、婦は其身躰なり、所有品なりに被らされたる損害に對して其夫と分離しつゝ訴訟を起すと能はざるに非らずや、若し其の身躰なり、所有品なりに損害を被らされたるとありて、正に要償の訴を起さんと欲するときは婦は其の夫たる者と連名して之を爲さゞるべからざるに非らずや、(佛國訴訟上第八百六十一條に曰く婦自己の權利を保護する爲め訴訟を起さんと欲するときは先づ其の夫の承諾を得んと求め其夫之を肯んぜざるときは裁判所の上席人に願書を差出し其の上席人は定まりし日に夫をして其の承諾を爲さゞる趣意を述べしむる爲め之を裁判役會議の室に呼出すべきとを其婦に允許すべし)其他英佛等の民法に於ては何に限らず、父を以て一家の長と爲し母は決して父と同一なる權利を有すると能はず、彼の後見の權利の如きも父の擲ちにする所と爲し、母は其夫の死去したる後に非らざれば後見に任ずると能はざるあり。

或は契約の權利に於て、或は財産の權利に於て、或は訴訟の權利に於て、或は後見の權利に於て、唯り夫に厚く婦に薄きと斯の如くあるものは豈に是れ之れを自由平等の理義に協合するものと謂ふ可き耶、豈に是れ之れを人間社交の要則に準據するものと謂ふ可き耶、或は曰はん右の如きは敢て必しも夫權を強大にして婦權を窄小にする所以にあらず、唯だ〳〵夫婦は同一躰の者なるが故に隨つて右の如きの規則を生じたるのみと、若夫れ婦にして夫と同一躰なるが故に獨立自主なしと云はゞ夫も亦婦と同一躰なるが故に獨立自主なしと謂はざるべからざるに至らん怪の怪なるものに非らずや、固より幾分かは夫婦を以て同一躰と看做すより右の如きの過ちを來たしたる、譯柄も無きにあらざるべし、左れど重もなる根元を是等の點に歸せんとする者は未だ吾等の與せざる所あり、彼等と雖も若し其の初めよりして「婦てふ者は夫の權力の下

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

にある女なり、婦の一切のものは皆其の夫に屬すあんと云へる悖理の成言を精神とするに非ざるよりは未だ必しも彼等が如きの尤めに陷る者とは成らざりしなるべし。

彼の拿破崙法律の如きは元と是れ平等自由の理義に基づき編成せられたるものと謂ふ可からず、一には專制主義を以てする羅馬の法律に因襲し、一には平等自由の主義に反對する拿破崙の思想に出入し、或は其の種を編ぎ、或は其の枝を聚め、之を綴り、之を合して作成せられたる所以のものなり、彼の拿破崙を看ずや、彼は婦人の權利に就きて如何なる言語を吐きたるか、彼れはサントエレーヌに在るの時に當りて實に左の如きの言語を吐きたるにあらざるか、

吾々の今日に至るまで婦人を尊敬して丈夫と同等の待遇を爲したるは實に大ひある過失にてありき(中略)若夫れ天性より之を論ずれば婦人は固より我が男子の奴隷なり、決して同等のものにあらず(中略)曰く婦人は只だ是れ子孫生殖の爲め丈夫に配與せられたるものあり

拿破崙は又婦人に謂つて曰く

婦人よ汝等何ぞ徒らに悲哀の情を懷くや、我輩と雖も敢て汝等を目して無精神なりと思惟するに非らず、然れども予は決して理學者の如く汝等を同等と認むる能はず、妄りに男女同權の說を唱ふる汝等の思想は是れ强暴あり、何とあれば婦人は固より丈夫の所有物なるも、我輩丈夫は決して汝等の所有物に非ざればあり、且つ又婦人の丈夫に於けるは猶ほ彼の園中果樹の植物師の所有に歸するが如く然るものなればなり、

男女の權利に關し、婦人の權利に關し、彼れ拿破崙の懷抱したりし思想と感情とは此れに由つて概ね知ことを得べきあり、拿破崙已に此の如きの思想と感情とを懷抱し居たりとすれば彼等が法典を編纂するに當つて夫婦不同權の凝結躰を成せしも更らに異むに足らざるなり、否な其の法律が夫婦不同權に傾向するとの畢竟遁るべからざるものにてありしとを知るべきなり、

語を寄す日本の婦人諸君よ、君等は民法上の權利に於て今猶ほ何事をも考究するを要せざる耶、何事をも論陳するを要せざる耶、噤口し、結舌し、以て不可あると無しとする耶、抑も將た是等の法律問題は婦人の思想に上るべきものに非ず、婦人の言議すべきものに非らずと爲す耶、恐くは是れ自から窄小にするの甚しきものなるべし、

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

今我が日本に於ては編纂したる民法なし、而して民法は將さに編纂して發布せられんとす、吾輩は未だ何年何月を以て之を發布せらるべきやを知らず、而して民法は竟に編纂して發布せざるべからざるものなり、我國婦人諸君は其の民法に於て、婦人の權利を定むること果して如何やうなるものと成るとも介意する所なしと爲る耶、是れ甚だ無神經の動物に類する無き耶、

彼の婦人を輕蔑すること殊に其の甚だしきを極むる腦髓より湧出し來りたる拿破崙法律なとの精神が今其の十九世紀の日月たるをも憚らず、海を航して日本に來り而して日本に於て制定すべき民法に乘り移り、以て婦人の權利を殺減するも有りとするも婦人諸君は猶ほ且つ喜んで其の民法を讀まんと欲する乎、甚だ是れ人情に悖逆するものに非ざる耶、

吾輩は未だ之を知らず、我國に於て將さに編成せらるべき民法の中に就き、其の婦人の權利を定むるには果して如何なる精神に因由し、之を定めらるゝや否やを知らず、只だ之を知らず、故に甚だ、不安心あり、而して婦人諸君は猶ほ能く休神すべしと云ふ乎、吾輩は万々解すること能はざるなり、切に願くは回思する所あらんことを、我が闔邦の婦人諸君應さに大に省察する所ありて可ならんのみ。

批評

○新著百種第三號の評　　萩の屋主人

是れ新著百種の三代目、唐様に印譜の屏風ひつきあり。表紙のカードをもなるくてよし、但し此摸様本文に何の關係やある、緣なき趣向は褒めがたし。

さて思案外史の「乙女心」うまきもの哉。實は「是れ大著述」と一生懸命に褒める筈の處、大方洒落だらふト有がた御迷惑を掛けるも如何と存し、矢張ホンのおひまつぶしの樂書と鑑定仕り、夢にもコンナくだらない小說が外史畢生の腕前とは思ひ申さず候。

作者曰は難なけれど見物曰は大難あり(ソレそこが好イんだ、是れは何故、ハテ此小說は「難だ」を主眼とす)。見物曰とあつても作者が曰サ。見物が作者か作者が見物か、獨り見て獨り笑ひ獨り笑つて獨り樂しむの風あり。竹の舍主人が「堀出し物」に紅葉山人の作者曰をもぢりしは色懺悔を諷せしからに喝采を博せしなるに何のわけもなく……是では地口となつて申さば猿眞似(ダカラ而亦いんダ)。

乙女心と白く紅の中に抜かれしは御趣向、赤いハート（心）と申す謎か（否エ、面赤いわけですよ）。

爰に一理屈申したきは外題乙女心とあれば主人公は云はずと知れし乙女なりと思ひきや、學士浪次も主人公の資格あり。さすれば乙女心と女の方に軍配を上げずとも「乙女及び學士の心」と改めたし。それでは俗極まる——シヤアずつと活歴に異本書生氣質。

回頭に歌澤の文句を插まれしは一見して作者の都々逸博士たるを知る、日光の變つた處がお景物。

第一回。初に「片山里の一軒家」とあり、さすれば山の景色でもありさふなもの、「廣々した田甫ばかり」とはチット形容がちがふ様だ、山里と申すは飛鳥山や道灌山の景色にはあるまじ、近く修善寺に遊ばれたら少しはお氣がつきさふなもの。夜の景色を寫すに桔梗や女郎花でもござるまい。七頁に「明治二三年頃から郡役所へ通勤」とはいづれの地方ぞや、二三年頃に郡役所ありとは我れ初めて聞きたり。八頁に「お天氣のいゝ夏の日だッたッけ、わすこの田畝へ蓮華草を」云々とあり、遲咲の蓮華草、返花でもあつたものか。十一頁に「へイ郵便」とあり禮儀に厚き配達人と覺ゆ大抵は「郵便引」と投込にするものを。殊にいづれの片山里か知らねど三府五港ならば兎にかく隨分市と云はるゝ處でも夜は郵便の來るは稀なるに住めば尼法師かと疑はるゝ此片山里へ夜——シカモ餘程更けたる夜に郵便の來るとはいぶかし。

第二回。二十頁に「キントン杯は頗る少量で殆んど三ゲレーンばかり」とあるはうまし。此處插語——うまいか——まづくはない。〆が古い、昔の繪入新聞から切抜たと思はれる。

第三回。三十三頁に「燒野の雉子夜の鶴」とあり、ズント古い詞、二人手に手を鳥が鳴く—邦幾千里の武藏野—奈麻與美の甲斐の國—竹の柱に茅の檐—雨を含める漁村の柳夕を送る遠寺の鐘—コンナ文句はドンナ片山里の人でも知て居る、造語に自在なる言文一致で今更に「燒野の雉子」でもあるまい（ナニ？古い詞で片山里の人情を穿つた處が妙ダ、ウッ成程）。三十五頁にお雪の詞「束髮の婦人」とあり、お雪も中々話せる——田舍に育つて難かしい漢語も知てるもんダ。三十八頁に「いつになく赤飯を焚て」とあり、作者の如き貴公子は御存じあるまいが赤飯と申すもの茶飯とは違ひて前晩より用意せざれば出來ぬなるに前夜をそく郵便を請取り今朝直と心祝に赤飯と思付はよけれど是赤飯では鼠でも噛れまい、それに赤飯

は蒸すと申す、焚くと云ふては下婢には分らず、勿論炎染を造る人もあるが。

第四回。四十九頁に「意馬を繫がむ厩橋」云々とあり、四十五頁に隅田川を遡るトあれば吾妻橋は過ぎし事と思ひしに是は〳〵案の外、厩橋より下をも隅田川と申すにや、我れ「乙女心」を讀んで江戸地理學者とありたる心地せり。

第五回。五十八頁に「五年越待ち草臥れた涙次が成業」とあれど前に八年前に東京へ修業に遣つたとあれば八年越でなくてはあらぬ、三年越忘れられたか。

第六回。六十六頁に「天命とは云へまだ四十二歳」とあり、三頁に「五十を越したかと思はれる老女」、四頁に「モ早五十の上を越して」、五十六頁に「モ早五十の上だから」、よも活字の誤植とも思はれず是は〳〵と申すばかり。草場の愁嘆うまふゴザリマス。

第七回。別に際立たる缺點もなし。此處插畫、是も最も古し。第三回に涙次が歸る時は洋服だらふか紋附だらふかと則子の物語、それに何事ぞ插畫の涙次の裝は——醫學士の風采少しもなし、ある人は醫科大學を卒業して千金丹でも賣りに出掛たのかと申したり、罪は作者にあり——畫工は本文を知らざれば。

まづ小瑕瑾はコンナもの。大瑕瑾と申せば人情に深からざる事、二ッには黴の生へた趣向。

涙次と申す男如何にも不人情者と思はる、前年の暮父が病死の時も歸省せず、卒業しても歸省せず、卒業して直ちに報知せず、家が見當つたら出京しろと迎ひにも來ぬ算段。

お霜母子も迂遠なり、我子我夫の卒業年月を知らずして今頃はランプの前で勉強して居るだらふと語りあふとハ。殊に十三頁の手紙文言に先便申上置候とあれば卒業は既に承知であるべきにお雪が「先月の郵便にも身體ハ至つて壯健で毎日學校へ通つて居ると書いてムいましたから」と云ふはチト前後矛盾の躰あり。

第三回に母子で夢の咄。お雪の恥かしい年頃でこんナ惚話しみた事が現在母親に向つて曰はれるもんでせうか。

凡て此編の人情は皮相も皮相も漸くエピダーミス位を穿つたものなれば一編讀了つて淺くもなし痛くもあし、されば是を無神經小說と云ふと青森出の友は曰ひたり。又可笑くもなく涙も出ず毒にも藥にもならず唯消化がよさそうふなれば麥飯小說と云ふべしと脚氣患者の友は曰ひたりき。

次に趣向は古物流行から思ひつきし天保年間の脚色。母子物語の中へ喜びの知らせ＝酒に酔て美人に介抱せらる＝母親が婚禮の支度＝隅田川の舟游＝寺参りの歸途に悪者に出遇ふ＝難儀の場合を旅人に助られる＝助けて呉れた旅人は我が夫＝暫しは手に手まづは目出たし＝いづれも土藏の下積とあつて黴の生へた品物を今更に硝子蓋の箱の中に並べるともあるまい、新著百種の新の字にお氣が附かれぬか。

かく書立てれば批評にはあらで罵詈讒謗とも思はるれど「如何なる悪評ありとも惡るびれず」と作者の詞もあれば思ふ存分平氣にてかきつらねしなり。我れ元より小説を著さざれば外史より悪評を受けし事もなく又遺恨嫉妬等の邊は少しもなければ悪氣にて此妄評を加へしにあらず。外史我れに書を贈て腕限り根限り悪口を叩けど、外史は頗る罵詈術に巧みなれば尋常にては靡くまじと思ひ切て徹頭徹尾面白くなしと、此小説を申すなり、され云へ文章は言文一致學校卒業生の腕前あり趣向も中々に讀むに足る全篇八十餘頁凡て玉石の文字。

附録紅葉山人作風雅娘、名文名想近來無類の上出來……とはコリヤちつと賛め過ぎた樣だ。

雜録

○率ざ出で、戰はん　みどり

世に於ての天國は學校にあり、教會にあり、年頭年暮の祝節にあり、洪水大火後の假住ひにあり、然れども尤も多くホームと稱すべき家族にあるなり。ホームは吾が枕らする所ろ、眠むる所ろ、慰さめらるゝ所ろ、尊はるゝ所ろ、又愛を寄する所ろなり、父母あり、兄弟あり、妻あり、子あり、忠實なる奴僕あり、慣れたる鷄犬あり、共に生立ちし庭園の樹木あり、我れ一日戰ひて夜此に歸る、夜破れて復た戰場に發す。久しく家に歸らず旅外にあり、暮色遙かに天を望みて古郷を懷ふとき、若くは冷々忍慘なる怪人物相群がるの間だに奔走するとき、一滴眼こにあり、顧みてカムプベルの詩を吟ずれば、

夜の雲下り、星の番兵出て、戰ひを休むとの喇叭鳴る、則はち數千は地に倒れたり、疲れたるは眠らんとし、傷つきたるは、死せんとす、皆な地に倒れたり。

余は亦た休みて藁の床に入り、死せしを覆ふ狼の跡ある荊のほとりに眠る、夜深けて余れ最と樂しき夢を見たり、夜あくる迄で余れ三度び夢みたり。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

幻ろに思ふ余れ戰ひの陣幕を出で、荒れし小徑を彷徨よひき、時は秋ありし、日かげすゞしく途快ちよく、只だ歡迎されんずる家にと歸りたり。生ちの朝た、倘ほ若かりしころ、たゞ樂しく歩ゆみける樂しき野面を飛び、高く響く家飼の山羊の聲、麥かりし昔しながらの仲間の歌を聞けり。家に歸りて祝酒を擧げ、余れ復た家を棄てじ、泣ける人々を後にせじと樂しく盟ひぬ、子供等は千度び接吻し、妻は思切りてか高くすゝり泣く。止まれよ、止まれよ、吾々と、休み玉へ、君は勞れて居玉ふを、もとより兵士は止まらんとせり、左れど夜の明ると共に悲しみ來たり、夢中の聲は溶け去りぬ。幸福なるホームの人の、出でゝ世に戰ふ大率ね如此し。

○若殿原　しづの女

若殿原は何の爲めに發生し玉ひつる、妾等は決して慕ひ參らせぬを弱氣たる猫撫聲、チヨロけたる下れる眉毛、臆病なる腰弱は意氣地、而して時に大家に眞似ての製造議論は、妾等決して聞たくも見たくもなし、若し妾等の愛を得ん爲とあらば寧ろ斷念して勉强あされ、迚も望みの適ふとなけん、郎等請ふ日を擧げて吾日本國を御覽あれよ、民力は衰ろへ、國力は弱はり、文學は腐れ、道德は動ぎ、四民は落天の下に蹐るにあらずや、男子にして之に慷慨せざる男子は妾等が友にあらず、空しき名を慕ひ、天造の顏立を愛するは一種の女のみ妾等が仲間にはあらず、諸君寧ろ勉强なさるべし、勉强なさるべし。

○慷慨と冷々　是空子

慷慨は不平より發し、不平は義に憤ふるもの若しくは利に貪ぼるものより發す、義に憤ふるの不平は平を得たるのち倘ほ熾んに、利に貪ぼるの不平は利に達したるのち萎縮す、萎縮するの慷慨は限りあるの地に發して永遠の善物にあらず、遂に益々熾んあるの慷慨は常に生氣ありて永久に存す。而して冷々は即はち慷慨の尤も慷慨したるもの、若くは慷慨の慷慨正に絶望したるもの、若くは亦た元來全く頑として石の如きものに發す。　世人乞ふらくは天の爲に慷慨し、地の事に冷々たれ、永遠の爲に慷慨し、假暫の事に冷々たれ。

○末松文學博士に參らす　靜岡安陪水畔　釣子友次郎

博士は國民學會に於て立派なる御演説をなされたり、余は親しく拜聽するの榮を得ざりしが今ト讀賣新聞にて其筆記に接し唯敬服するばかりにて候。余は無學文盲にしてプレトー、アリストートルの哲理アリオストー、ソフオクルの文學は勿論和漢洋とも七むづかしき理屈めきたるは嫌ひなれば今日の新聞を手

に取ても社説は少しも見ず見ざれば新聞記者の文章が意味通じがたく又讀み難きや更に知り申さねど小説は古今の好きにて都の花はじめ小説雜誌新聞小説までも眼に觸るゝは殘りなく通讀仕り候。就ては博士が今日の小説文章に對する御高見に對して少々疑惑の點有之候故御質問申す、御多忙の博士にしても御晩酌の御ひまもあらば御教示下されたし。

博士のたまはく、

此頃は小説の著作最も流行する中にての作者は或は馬琴口調に習ひ若くは爲永口調に摸するものもありて一定せざれども誰一人として傍らより聞いて了解し得る樣に書けるもの殆んど皆無の姿にて分りがたき漢字を交ゆるもの殊に多きが如し彼の都の花の如は元來フハミリーに讀んで聞かする極やさしきスタイルにてあらねばならぬものなるに是れを他人に讀まし傍らより聞いて了解しがたき所あるは餘り感服の出來ぬ話なり。

博士は馬琴口調とはドンナもの爲永口調とはドンナものであるか御存じですか。又今の小説家中にて誰が馬琴口調に習ひ誰が爲永口調に摸せられますか。なるほど六七年も前には小説頗る退歩して所謂新聞小説は殆んど讀むに足らず、渡邊文京伊東橋塘等の人々、現に須藤南翠氏なども馬琴口調に習はせられ又故染崎延房及古川魁蕾などは爲永口調を摸せられたが春の屋主人が一生面を開きし以來は馬琴口調は殆んど絶へたり（都の花の中にても馬琴口調は槐堂仙史とやらのみと覺ゆ）。爲永口調に到つては染崎古川の二氏は春水の流を酌む人々にて染崎氏はいろは文庫をも初代春水に嗣ぎて作られしほどなれば其文章の祖先に似るは不思議でもなくそれすら今日にては此口調も殆んど絶へたりと云ふべし。もし今の小説は重に談話躰に作るから爲永の口調を盜みしとならば爲永も京傳のしやれ本調を盜みしにて京傳口調と云ふても可なるべけれど京傳には京傳爲永には爲永春の屋には春の屋二葉亭には二葉亭と多少其文格を異にするを如何せん。余の目をもてすれば今の小説には馬琴或は爲永の口調殆んどなし。

今の小説は少しも分らずと云ふは馬琴或は爲永の口調を用ふる故に分らずと申さるゝにや將た馬琴或は爲永の口調にあらざる故に分らずと申さるゝか、何れにもせよ合點の行かぬ話なり。前者ならば兎かう云ふまでもなし。後者ならば愈々いぶかし。余が見る處にては今の小説は昔しの西鶴或は馬琴の小説よりも頗る平易なりと考ふ、二三を除くの外は餘りに平易にしてたわいなき樣なり。内外百卷の書を涉獵したる博士が解する能はずして僅か二三の新聞雜誌を拾ひよみにする余が充分に解するとは頗る不思議千萬の事にして哲學者の腦髓を苦しますべきフハクトと存す。博士の曰まふまでもなく小説に限らず凡て文章は平易なるをもて尊しとするなれど平易なれば何でもよしと云ふわけはあるまじ。韓退之の文も柳々州の文も各々一種の妙味ありデクヰンシーの文もマコーレーの文も皆各樣の趣味あり。名家の文に平易なるものがあればとて平易なるが名文と云ふ理屈はあるまじ、もし博士の曰たまふ如くナンでもかでも平易々々とすれば文章は終に辭達主義となりて丁度余が評さし此文の如く味もなんにもなきものとならん。今の小説文章は平易なりと云ふ余の考をすて博士の御説に隨ふて難澁とするも平易にあらぬ故に惡文なりと申す仔細もあるまじ、アヂソンやデフオーは平易なれば名文なり但しミルトンやスコットは難澁なれば惡文なりと申さるゝか。又都の花は讀んで聞かせてもフハミリーに分らぬと申さるゝは都の花それ自身が分らぬにあらで日本のフハミリーが無學なる故ならん。無學なるフハミリーでも余の家人などは常に愛誦して少しも疑訝の躰なし。

博士が谷間之姫百合は仰の如く名文にて近來珍らしき絶好文字と存す、御苦辛のほど恐察仕り候。

右關書として掲載すべき樣申越されたれど都合により本欄内に收むることとしたり。（編者白）

○言語文章の魔力

しのぶ

理屈は言はず、凡そ物の傳はると最も早きは感想ならめ、鳥の飛ぶよりも早く、馬の驅るよりも早く、弓矢鉄砲の射るよりも早く、將た電信電話の閃めくよりも早し、吾れ泣く、彼乍ち泣く、吾笑ふ、彼乍ち笑ふ、吾れ怒る、彼乍ち怒る、喜怒哀樂の情吾れ之を發てば直ちに彼に到る、其の到るとの速やかなる實に何物よりも早し。其理屈は知らず、言はず、實際に於ては必らずや然るなり。

左れど實際には中々に然らざるものもあり、吾泣けども人胸打たず、吾笑へども人居眠り、吾喜べども人後ろ見し、吾怒れども人の平氣なることあり。思ふに此れ吾が感想の人に傳はらざるにあらず、其感想の素と傳はり難きものにてあるなり、

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

弓は矢あらでは放ち難く、電信には電氣の作用ならでは傳はることなし、吾々が言に述べ面てに現はして傳へんと欲する所ろのものは、亦た即はち人に傳はり得べきところのものならずんば能はず、何をか傳はるべきものと云ふ、人間眞實の情これなり、若し吾れ眞に怒らば人豈に怒らざらんや、若し吾れ眞に泣かば人豈に泣かざらんや、人類は總べて同胞にして同一根に生る、吾も人も此の天元より發するの情に動かば、其感想の傳はること蓋し何物よりも早し。

而して文章言語の此感想を傳ふる所以實に不思議を極む、文字は素と死物にして三々伍々斑列し、言辭は素と浮氣にして出るまゝに飛散消滅し行く、左れど其の感想を荷ひ行く魔力の如何に驚ろくべき哉。

感想は言語文字の上に載れり、躍勃して人の耳目より入る、乍ち胸腹を攪動し、感線を觸叩す、此に於てか人或は泣き或は笑ひ、或は怒り、或は喜こぶ。言語耳に達すれば言語中の魔力出現す、止むれども止まらず、押ゆれども押へられず、刺入し、穿入し、竄入して、突入し最胸底に食入る。文章すでに成れば感想三軍の威あり、一と度び目に觸るれば各兵一々突進し來る、其相結ぶ鐵鎖を以てす、離ちがたく、斷ちがたし、堂々進來、吾が滿腹に塡充して凱歌を揚ぐ。

○鹿鳴館、紅葉館（詩）　湖處子

嚶々友を呼ぶ戀の積り成したる鹿鳴館
林間酒を温めて紅葉を燒く紅葉館
一石一樹の妙あれば收め殘さぬ園作り
一艸一花の美を見ては移し後れぬ庭飾り
花より明る花の窓夕日を宿す水の樣
長き春の日秋の夜は誰が此館の賓客ぞ
遠く響きて近く來る先より後の肥馬輕車
轟き止めば悠然と下る將大臣又華族
唇掩ひて美はしき鬚こそ君が誇なれ
交際場裡の女王ぞと其の奥方の艶姿
又來る馬車より輕く出で腕を組たる二人連
光る公子の兩の目は宵の明星薔薇の露
此方に向きし姫君の容貌は如何成花ならむ
後より後に一人宛戀の希望に笑顔して
少年少女の幾行處々の道より集ふなり
時刻となりぬ餘の人に洩らし容さぬ妙音は
曾て我等が得も聞かぬ霓裳羽衣や想夫憐

數多間はる唱聲は漸く消へて樂器の
獨吟淸く窓を出で初まる舞踏を告るなり
面は空に飛ぶ扇衣は輕き花の雪
軟き足も群れ踏めば地球の心に響くなり
滴々裳に垂る汗も集ひ振へば雨すなり
呼吸は朧る室の雲人の情は餒なる
一曲終れば二曲出で前音後音を起しけり
時進む程蹈み急ぎ近く復りて遠くゆく
夜の勞臥や哀情は實に此界の物ならず
世辭の貴き世の中や洒落の火花は顏を解き
人目も壁に耳もなく戀の聽るゝ其易さ
比翼の鳥や連理の枝の毎日毎夜に生るゝは
天人天女の遊戯乎世に云ふ此處が蓬萊乎
ヲヽ去り乍ら鄙人よ朝夕野邊に骨を解き
高貴に平生ある歡樂を百歲待てど享ぬ身の
責ては容好き息子だに又乙女だに世に生て
斯かる遊びに唯一度侍らせもして其が壽命
但しは家の光輝を祝はんものと詞ふ勿れ
此處は生活の大渦ぞ颱風烈しき沙漠ぞ
室の一點一畫も未だ改られぬ其中に
移り易きは世の流行變り易きは人情
色香の習は萌出るも枯るゝも同じ野邊の草
孰れか秋に逢はざらん妓王も佛も班婕妤も
去れば弟は兄の仇姉は妹を嫉み焉
嘗づる口に蜜を置き腹の劍を藏せども
媚る笑渦の深き程頰に隱るゝ穿を見よ
一たび斯處に入る時は惡懼の鬼なれや
何時又誰か復出づる出るは墓に入る時ぞ。

○女子の邦國に於ける地位

獨逸某博士　述
淸水紫吉　譯

從來一般の國民は婦女子を以て彼等の夫或は父の如くに同一の國民則ち人民なりと考へしかども然れども亦た之れを邦國に對して間接の關係を有せる所の人民なりと看做して決して其の充分なる權利を有せる所の國民の一員なりとは考へざりしなり。

夫れ然り然りと雖ども近時に至りては種々の見解を下すもの生出するに至り早くも一千七百八十九年の佛國革命に於て一婦人が國王に請願して政治上の權利が婦女子にまで授けられんことを求めたり其の請願たるや例令ひコンドルセットの贊成する所とはなりしと雖ども然れども國民議會は輕蔑したる調子を以て是れを拒絕したり而して吾人の時代に於ても同一の請求が訴願されたり就中ジョンスチュアートミルは彼れの著述に由り國會の評議に由りて屢く此事を論じたり。佛國に於てはエドワードラボレーが同一の趣意を以て論じたり亞米利加の某國に於ては女子に政治上の權利義務を配與せんとの計畫をなせしものあり。

今まミル氏が婦人の邦國に直接の關係を有すべき所以のものとして主張せし所の重なる理由を擧ぐるに槪し左の如し。

第一婦女は猶且に支配せらる可き人として同等の權利を有せり而して猶且なる政躰は代議制度の主眼なればなり然りと雖ども兒童は猶且に支配せらる可き天然の權利を有せり換言すれば邦國の保護を受く可き自然の權利を有せり夫れ然り而して一人たりとも是れが爲めに彼等が投票を有せざる可からずと論辯するものあることなし凡そ猶且に支配さる可き權利は其の政府を支配し或は支配することの部分を取るの權利をば包含せざるものなり而して前者は純粹なる受動的の權利にして後者は自身の資格を豫定せり。

第二茲に公私の權利の間に移動す可き恐の明白なる矛盾ありとす夫れ私法に於ては婦女は直ちに彼等の學動を制限せられ且つ彼等の夫婿の留主居として考へられたり然りと雖ども一旦彼等にして自己の財產を處置し得べきことを公認せられたるに及んでや此の保護抑壓は廢棄せられて而して兩性が同等の位地に立つに至れり。

是れに反して公法に於ては其の區別が維持せられて吾人は婦女子に男子と共に租稅を拂ふ可きことを要し而して彼等には其の承諾を表するの權其の費途を計算するの權を附與することを拒絕せり。

斯の如く吾人か其他許可せし處の資格を拒み而して社會に於ての一私人の生活に便利を與へし所の男女同等の擴張を妨害することは抑も不正なり。

第三茲に吾人が現時の法律に於ての一層兩立し難きの點を發見するなり何となれば婦女子に凡べて政治上の權利を與ふることを拒みたる處の多數の國民が屢々女皇に政府の最上權力を託したればなり。

氏の所說は羅馬及び希臘に適用す可からずへりヲガバラスが已れの母を議官に推擧せり然れども彼れの死後に至りて議官が評決して婦女子を議官に推擧せし所の或人に對して上帝の哉判を仰がんとするに及べりとぞ以て其の羅馬人の思想を窺ひしめたることを知る可し又た多數のチユートニツク人種は國王をば男子に限る可きものとなしたり史家タシタスは英人が婦人政治を採用せしを以て英人の特有なりとは記載せりロンバード人は亦た屢々王位相續に關して婦女子の系統を採用せり稍は最近の時代に於ては女子は屢々王位に置かれたり英吉利墺地利露西亞西班牙葡萄牙及び其種他々の政府の下に於ての近世紀を看よや。

○紙帳もそれ〳〵の入物

心にかゝる山のはもなき武藏野といへど、月にうき雲すこしさはりある浪人、とふ人あれバわぶと、こたへて、年久しく芝浦のほとりにさすらひしに、夏の比珍客ありて、素麵を調してふるまふとて、からしのこを尋けるに紙袋に書付なく、あれこれとさがしやう〳〵取出し、もてなして歸しぬ、暮方におよびかしこからぬむす子よそよりかへりき、親仁いふやう、あの紙ぶくろにハ、それ〳〵の入たる物を書付しておけ、いそぐ時の用にあハぬといへバ、心得ましたとてやがて親仁ねられけるとき紙帳に大筆にて此内におやぢ有と書きつけた。

○牡丹ハ子細の種

さる所に一もん不通にして牛の角文字もしらぬ人ありよろづのとに子細らしくこバしたがる僻あり春の比客人入來りて庭の木立石のあしらひに氣をつけ花壇の色々牡丹の手入めづらしき花さて〳〵きれいなる掃除うら山しき御なぐさみかなとほめけるにかの人あまりうら山しく思召ば、花前へ小鳥ども

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

がぐんじゆいだして、馬ふんをつかまつるに困窮しますといふた。

○山鳩に耳あり

舊弊曆にたねまきによし一粒萬倍日とあるを見すまして、畠をうち种をまきけるわ、隣の百姓野に出けるが、やい〳〵けふは何をまくぞとよびかけければ、先の百姓小手まねきしてあい〳〵聲が高ひぞひきく〳〵といふ、扨は世にまれなる唐物種うゆるにやと思ひさし足してちかく寄たれば、かの百姓さゝやきていふやうは、別の物ではない、けふは大豆をまくが鳩どもが聞つけおろうと思ふて。

Last Rose of Summer.

○月に歎ず

南石外史

わづらひみだれ　やすみせず　夜深くにはに　いでゝ見る
あゝてんの月　あゝ天の月　すめる面ての　てらすなり」
くねりしひとに　くろしみて　まがりし中に　くだかれぬ
あゝ消きつき　あゝ高き月　かわらで吾を　てらすなり」
さとりてあまり　おもひ屈し　よろづは暗く　疑たがわる
ひさりやすし　あゝ天の月　昔しもいまも　てらすなり」
るてんつねなき　世に居りて　のぞみは長く　かぎりなし
あゝてんの月　あゝ天の月　われらが命ち　みぢかきや」

兒鑑

○兵士の宥罪（其三）　しきたへ

偖もブロッソムはワシントン府のホワイト、ハウスに到着し大統領リンコルンに面謁を請へり、時にリンコルンは朝飯を終て種々の書類など調べ居りしに戸を開て入來ものあり卜見れば年弱き小娘の色蒼ざめて唇には無限の憂を顯わし眼には涙をうるませ手を胸のあたりに横へたるが物をも言はず直立せり大統領リンコルンは不思議の事よと思ひたれば、幼兒よかく早朝に何の要事がおわするぞといと優しくも尋ね問れ乙女は答もなみだのみ先づ思を押鎖め、兄ベニーが命をばと云ひたるのみ言さえに思ふよふには云ひも得ず、ベニー、ベニーとは誰れの事ぞ。そは我が兄に候なり守兵の務をもちながら眠りたりとの事により聞けば砲殺の所刑に過ふとか何故兄が命をば。チー然り我は確かに記臆し居るなり御身よく考へ見よベニーが守衛の其時は最も危險の塲合あれば僅かの眠りに數千の兵士を殺すいたましき事なしとは云ひがたし。ベニーはいたく疲れ居り其友のチエミーも病後の爲めに衰へ居りしと父は語り候ひき兄はチエミーの荷を背負ひ其夜の番もチエミーの爲めに自らかわりて務めしとか、チエミ

ーを思ふ心のみ自らの爲めにせし事は露程も候はず。　リンコルンは小女の言を聞て、　御身何事をか申するぞ我は少しも理解し難し傍近く來られよ詳しく尋ぬる事のありとブロッソムを招き寄せ肩の上に手を措て物靜かに問はれたり。合衆國の大統領リンコルン氏の價値は此に顯れたり。ブロッソムは軈てかの兄が書狀を取出しそのまゝ前にさし置けば用こそあらめとリンコルン初めより終り迄讀み終て驚きたる容貌不思儀と見上るブロッソムの顏をながめて傍なる筆取上て。いそがはしく一つの書翰を認めて從者を一人呼出し、コハ大至急の書翰なり早速に差立つべしと命じ終て、さて云ふよう小女よ御身は歸宅して可なり御身が父のよく國家を思ふ事亦御身が兄の義氣ある事此のアブラハム、リンコルン恰と感心いたしたりさる人の命を取らん事は惜んでもなほ餘りあり如何にも助け得さすべし明日迄此に止り居らば兄のベニーと諸共に家路に歸り得べきにこそと聞くブロッソムの嬉しさは天へも登る心地すべし。次の日は朝よりブロッソムは兄の出獄を待ち居たるにその日の十二時頃ベニーは許されてホワイト、ハウスに來り久しぶりにて妹と對面しその日の夜半に我家へこそは歸りけりベニーの義俠ある心ブロッソムの兄を思ふの心茫漠なる社會の荒地には得難き人物には非ずや

史傳

○一仁人の傳を讀みて感じつる儘　　みどり

人は乾燥したる道理を好まず、生命を好む、人は單獨にて孤居するヿを好まず、必らず友あらんヿを好む、之を以て何よりも人の傳紀を聽くヿを好むなり。

吾人は正しきヿの慕ふべきを覺悟す、然れども只だ正しきヿの正しき所以を聞くを以て滿足しがたし、寧ろ一義人の善に死し忠に奮激したる事實を聞くときは全身の躍り立つを覺ゆるなり。クリスト世に來りて曰く、吾は豫言者の言を破るものにあらず、吾が言ふ所ろの戒しめは猶ほ古しへの誡しめの如し、即はち汝曹相ひ愛せよと、吾人此の敎へを聞くとすでに久し、釋敎に於て慈悲を聞き、孔敎に於て仁を聞き、師父によりて善德を聞きたり、然れどもクリストの特に重き所以は其の敎へによるにあらず、其の十字架上の犧牲献身の實行にあるなり、書經大乘は主も議論に充つ、聖書は主も傳紀に充つ、吾人が樂しく感ずるの相違多くは此にあり。

然れども吾人が仁人義者を見るは恰かも美なる繪畵を見るが

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

如し、其濃淡の墨色、其清高の理想は實に吾人を喜ばす、吾人は高尙なる書論を聞きて尙ほ欠伸すれども、淸潔なる書幅を見るときは感歎して止まず、如此く吾人は偉人傑士を見て轉た丶感歎して止まざるべしと云へども、此の偉人傑士仁人義者は更らに大ひなる自然畫工の創造し展覽したるものと信ず、故に畫を見て畫手に服する如く、大人物を見て創造者に服す。ニウトンの傳を記したるもの其終末に至りて曰く、如此き大腦力の大哲學者を造り出したる神々は益す贊美すべけれと。

吾人は甚はだ謙遜たらんとを祈るもの也、故に如何なる車夫乞食を見るとも之を卑しむの念あらざるを期す、然れども亦た吾人甚れだ獨立の人たらんとを祈る、未だ嘗て王侯貴人に心を屈せず、未だ嘗て學士論客に念ひを曲げず、彼の仁人義者英雄豪傑に至りても、吾人は亦た吾人の靈能を服せしむるあたわざる也。

左れば吾人の傳紀を愛讀する所ろ少しく衆に異なる、之によりて吾等人類の發達し得べき地位を悟りて益す已れの尊ときを確認す、之によりて人世の方向生命の歸着を考へ以て人類の万界に於ける責任を感悟す、之によりて天の上帝の生命あり万能あり圓滿せる靈德あるとを確信し益々自巳の分限を覺悟す。嗚呼仁人よ君は吾人が良心の代表者なり、嗚呼義者よ君は吾人が精神の代表者なり、嗚呼偉人よ君は吾人が代言者なり、嗚呼傑士よ君は吾人が先證者なり、嗚呼英雄豪傑よ君等は吾人が辨護人なり。天に謝し、地に祝し、人に慰さむ、吾人乞ふ共に歌ひつ丶勉めつ丶進まん。

小說

○酒鬼（其八）

藤[illegible]主人

夜は更けたり、堤上の琴引草は呀へたる月を相方に樂しさふに調べ、寒風は刄を磨ぎすまして縱横に往來を惱まし、其果は宿栖の鳥を駭がして面白き松の合奏を亂し、其處此處となく大空に冲る凄さ。

見れば空には一點の雲もあく眞晝をも欺むくだけに其凄き光は縮緬の領巻三枚小袖をも徹して骨身に染み渡る。今少し前までは人力車の提燈もチラホラ散點して堀端には人通りも稀にはありしが、冬の夜の常――十二時の鐘が打てばトント人の影も見へず、富士見樓の紅燈も最早消へ、星の樣に見へし本鄕台の燈火も一ツ二ツ段々になくなりて、今は日に見ゆる

ものとてはなく見渡す果は唯薄墨の隅ばかり。小石川練兵塲の堤際を通るは夜目にも小倉の古洋服にて知らるゝ山澤作次。悄然として堤際に彳ずみ日頃に似氣なく酒の氣わい有りとも見へず。嘆息もせず首うなだれ手をこまぬきて寒風に身を戰はせり。暫らくして巡行の巡査其前を通りしが是も不思議さふに作次をながめ角燈をさしむけ樣子を伺ひしが作次は氣の附きし躰もなく二三步行きしかば巡査も見返り〳〵立去れり。

行違ひにいそぎあしに來たるは汚れたる二子の袷一枚に三尺帶をしめ細鼻緒の麻裏草履をつッかけたり、

「オイ山澤」

山澤はふりむけば是は如何に久保村、飲仲間で仝じ職工の中でも一ッ鍋をチワつかせた仲それも、前夜から酒を强ひられて心の酒鬼に誘はれしとは云へ、是が爲に亡父の命日を忘れ母――今は亡せたる――母の怒を起したる惡き久保村。怨むも無理だがおのれがなくば……

「山澤……手前は内へ歸つたのか」

作次は返事もせず素氣なく行過たり、久保村は肩を押へて、

「オイ歸らないんダナア、今手前の處ェ行たんダ」

「おれの處ェ、燒跡へか……」

「馬鹿、燒跡へ行く奴があるか…釘拾ひヤあるめエし」

「邸へか」

「ウンさうよ」

「お母は死んだか」

「ウン汚ねエ枕屏風が立て居た」

作次は嘆息をつき路ばたの草の上にドッカリ坐りて首うなだれ最早語り出づべき勇氣もなし。今日正午前久保村が家を出て直にも高塚の邸へ行かんと思ひしが前夜よりの不始末に流石の作次も氣が咎められて、ソコは小人の悲しさ過誤を改むるを憚かりて唯「惡るかつた」が込上て邸へ行くこともならず、さればとて醉が醒めて見れば久保村の家にも心苦しく、歸る家も行く處もなく、心配と痛苦に一日を送りあちこちを居所の羊の足踏して夜の宿を何處とも定めず八幡の鐘を水道橋で聞きいつとなく此處へ來れば憎き久保村――是も心細き身には賴もしき久保村に出遇ひ。無情な一言――枕屏風と聞いた時には我身も既に絶命したる心地。

「手前今まで何處にマゴ〳〵して居たンダ、サッキから方々索したんダ」

「おれか」
「ウン手前よ、當り前さ」さも悪々しひ言ひ方だ「ウンさふだ、手前十錢返さねエか」
作次は怨めしさふに久保村を見て返事なし。
「オイ錢、返さねエか。おらア十錢無いと明日の飯が食へねエからナア、オイ返せッて云ふに‥‥」
「返せッたッて無へよ」氣の無い作次の挨拶。
「無エ‥‥馬鹿、借りておいて無で濟むか」
「濟むも濟まねエも有る時返すよ」
「有る時‥‥くそッ馬鹿野郎め」
此社會の常で久保村は不作法にも拳をもて作次の横面を打つと沈んだ作次もムッとして、
「な‥‥なをするんだ」
「何を‥‥此横着野郎め」
復も頭を打ちし故流石心よしの作次も立上りて一言二言。ナニ‥‥おのれが、ナンダ此野郎と打ちつ打たれつ組んづほぐれつ。返さねエか、返すもんか。間抜、横着野郎。暫しは草原の上にて揉合ひしが頓て久保村はムッと作次を組敷き、
「お‥‥おのれ、横着野郎め‥‥返さねエか、是でもか」
「此‥‥此ち‥‥ちき生め」
悔しさふに作次ハ久保村の髪の毛を摑みて一生懸命に引張れば久保村も痛さに思はず力ゆるみてはねかへされ再び起上つて死物狂ひ、十錢の金が基で命の遣取。十万億度の迷土の旅路、是では草鞋の賃も覺束なきに。
暫らくは揉みに揉んだり。以前には殿様と云はれし作次と違ひ小供の時から荒仕事に馴れたる久保村の力や勝りけん、力足を踏みそこねて蹌々と轉けかゝる弱腰をドンと突けば無殘や作次はヒヨロヽヽと岸邊の草を踏みしだきて小石川の堀へ水音高く。久保村は息つきあへず手近な轉石を取りて投込めばアット聲上げて水に沈みて姿は見へず。
「ち‥‥ちき生め、おそ‥‥おそろしひ骨折らせやがつた」
人一人非命に殺したを蚊を殺したほどにも思はず、水面をながめて獨り言、
「死にやアがッたか知らん、馬鹿野郎め」
悪々しく罵つて推石ほどの大きさの石を抱て擲り込みたり、水音は高く遙に響けど次第に静まりて元の寂寞。空を見ればいつか浮雲は走りて眞如の月は空しく曇り、冬の夜の景色更に物凄し。

久保村はジット堀を見て頓て思ひ出した樣に帶に挾みし手拭を被り足早に堤に上りたり。小石川橋の上提燈の光と共に聞ゆる車の音。

○○○○○○○○○○○○○○○○

其翌朝飯田橋の傍に人山を築きたり。房楊枝口に赤き唾を吐く若檀那草帚木片手に寐惚眼をこする小僧おのがさま〴〵にのゝしる、朝通ひの砲兵工廠の職工が二人連立て人の肩越にのぞき込みしが「ヤッ……見ねエ、似て居る樣ダゼ」と調子高に曰ひたれば數多の群衆は不思議さふに此二人を見詰たり。耳の惡き老人が腰を延しながらコレは何事……ナニ土左衛門でござるとな。

（四回）

寄書

○ラムエル王の詩

桃町舜堂　微石生

德ある女の夫の心は唯其女のみ信じて安らけし、左れば浮べる雲の利達を求めず
彼女は、夫に幸を與へ彼を害することさらに露の玉緒消ゆる迄
務めかちなる手を以て毛を織り麻を紡ぎて倦みもせじ
商賈船に能く似たり遠き里より自ら飯を運ぶ時
夜は未だ明けもなさゞるに夢を破りてとく起出其日の飯を供へつゝ一日の仕事を分け配り家の婢に與ふなり
熟慮を凝らして良き田を求め葡萄の園を作りなし
商賈なして好き利を售れどかの燈は與夜中にも猶輝やきぬ
其手は常に梭の上にあり紡輪竿を握りつゝ
其手は延びて寄るべき憐の民の上にあり……乏しき人の上に洽恩毛飛べども
狼狽へずりは彼の愛らしき小供等は皆緋の毛氈を纏へばなり
艶やかなる花を作りぬ衣は絹に色は紫
村の雖彼打寄る時夫の興ぞいさ高き
いさ美はしき更紗を作り又或る時は帶をも作りて市や人に渡ぎたり力(Strength)と名譽は彼が此上なき衣もなり彼は來一日を思ひ潤りにこやかに打笑みぬ
怜悧き口を漏れ出づる言の葉は親愛の則にぞある
家内を整へんとて氣を配り「怠りのぱん」は口にだもせず
賢き稚子は起上り幸福はしく母を讚美す夫も亦其を讚めて
德ある娘はいと多なり左れど爾は凡て彼に尙越れり
雅麗は欺き多く華美は呼吸なり左れど「エホバ」を畏るゝ女……彼は四方より名譽を受けん
褒めよ！女をその手の作りし果の爲めに褒めよ！
博士ゲイキー氏右の詩を評して申されけるは
如何なる世の如何なる文學も理想の妻及び母を斯迄明亮に寫せしものあるを聞かず然り實に希臘の歷史は猶一片虛誕の内にあり羅馬はパレスタイン丘上の草昧なる一部落に過ぎざりし二千五百有餘年前の古代に生れし此詩に及ぶものあるを聞かざるなり

と

原文は洋々として情味深し譯文は乾燥にして無味なり左れど若し斧正を仰ぎて幾分の佳味を得ば識は愧せて女學雜誌の餘白を汚せ

○法理上父母の許諾は婚姻の必要條件なりや

秋洲健二郎

予は本誌百六十四號に於て婚姻年齡に定限を設くの必要を述べ併せて年齡を限るべからずとする好事學士の奇說を非難したり然るに今や婚姻には父母の許諾を要せずと論じ來らんには前後矛盾の外觀ありて予も亦他より奇說を吐くの好事家視さるゝ恐ひありと雖も法理の在る所正道の存する所世人の目するに奇說者を以てするの地に立を辭せざる也たとひ各國の法律に此條件を要するも我民法草案に之を規定するも世間父母たる人の意を損するにも拘はらず斷して此條件の不必要なるを唱へんとす乞ふ之を陳べん予は理由なくして言ふものに非す。

抑も各國の法律に此條件を設け數多の學者の之を贊助するもの其理由とする所にあり即一方には尊屬親を尊敬し一方に於て婚姻者の利益を保護するにあり倚之を詳解せば血氣の爲に野合し其極遂に婚姻の破綻を來すか然らざるも中夜牆を非中に飛し三更密夫と携へて家を出るの惨劇を恐れてなり是れ誠に親切なる規定と云はざるべからず注意の至れる法條と云はざる可からず尊屬親は云ふまでもなく元より尊敬せざるを得ず又結婚者は社會の元質なれば宜しく之が利益を保護せざるべからず予何ぞ異議を入れんや然れ共此親切なる目的に出るも此注意なる保護に出づるも其結果却て結婚者を困ましむる時は寧ろ此規定なきの優れるに如かず否之を廢除するの必要あり彼の尊屬親を尊敬すべきは吾人女子たるものゝ本分なれ共然れ共自己の苦痛不本意なるを忍んで尚且つ之を尊敬するには及はず吾人は此規定の弊甚なるにも拘はらず其結果の却て害毒あるを見る即ち愛戀を以て婚姻せんと欲するも(野合と混ずる勿れ)尊屬親の意を迎へんが爲め即父母の許諾なきが爲め利益に因する婚姻虚飾に因する婚姻を爲さゞるを得ず予は今之が無數の適例を有す然れ共愛に拘ぐるの必要なし若し之を見んとを望まば汝の頭を回轉せば前後左右に許多の適例を見る可し婚姻を保護せんとして却て之を苦ましむるは害甚の法と云ふべからず尊屬親を敬愛するは他に其途ならかんや尊敬せんが爲に愛戀の婚姻を結ばしめざるは抑も本末を誤れりと謂ふ可し。

既に法律上に年齢の制限を定めたる以上は此年齢に達したるものは一個獨立自由の人間と云はざるべからず果して然らば豈に又他に父母の許諾を要するの理あらんや此年齢は充分結婚するの能力ありと認めたるものにあらずや尤も父母は日夜子女の身上を熟慮し決して子女の不利を計るものにあらずと雖も其認めて利益なりとするものゝ子女の不利たるを知らんや子女は經驗に乏しとするも父母の經驗は以て之を子女に適用すべからず婚姻は結婚者一身の感情に因るものにして之に當つるに他人の經驗を以てするも何の効かあらん効無き倚忍ぶ可し害ある之を如何せん子を知る親に如かずとは古昔の金言なる可し今日の金言とは云ふべからず唯道義上の本分あるが故に可及的可成的父母の許諾を勉むべきは兎も角も強てしかも法律上之が許諾を要すとして婚姻の條件とするは非也結婚の自由は人々固有の不可侵權利なれば道義上の本分あるが爲に此權利を屈すべきにあらず威柄を以て壓すべからず權勢を以て服すべからざるは男女婚姻の一事なり只此本分と此權利とをして共に與に伴はしめんとを欲するのみ。

予は望む定限年齢に達する者は婚姻上自由の人たるを記せ結婚は吾人の權利なるを記せ又婚姻は子女の身分に關するものなることを記せ然らば何れの點に於て父母の許諾を要するを見るか。

然れ共予は此年齢に達するの青年男女諸君に向て如何なる結婚にても爲すべしとは云はず牢を共にして食するは一生を約する所以にあらず高砂の謠曲は琴瑟の調ふを保すべからずされば諸君は諸君固有の此自由の權利を以て正當なる婚姻即ち一夫一婦の婚姻倚は之を言へば愛戀を以て合したる婚姻を結ぶべしと勸む。

新報

○喜びて正誤す

愛媛縣尋常師範學校より左の如く申來れるに付其全文を掲ぐ、

女學雜誌六月廿七日發行第百六十八號雜報中女生徒の服毒と題する事實無根なるは勿論本校に於て殊に品行上に付取調等を爲したることなし現に生徒貳拾五名一同無余念勉强致居り候間速に此全文を掲げ正誤有之度候也

廿二年七月四日　愛媛縣尋常師範學校

女學雜誌社御中

○宮城正門外の銅像

を建設せらるゝ由にて左の通り九鬼氏より日本美術協會へ申進せられたり、

今般皇城正門外廣場中央に銅像を裝置せらるべき儀に付當館に於て左記の制限に由り圖案を懸賞蒐集取纏候間貴會員中御勸誘相成考案差出相成候樣致度右は皇城壯嚴の一に供するのみならず本邦美術の模範たるべきものに付氣格形相は成るべく森嚴を旨とせられ度此段併せて申進候也

明治廿二年七月五日　帝國博物館長九鬼隆一

日本美術協會會頭佐野常民殿

一銅像は中世以來本邦歴史上著大の關係を有する人臣の偉者は國體を代表すへき想像的の人物たるへし

一銅像の大さは皇城正門外廣場中央に裝置するに適當と認むるを以て度とすへし

一圖案は全く自己の考案に出てざるべからず

一圖案は成るべく正確に認ため大小高低を明にするを要す

一圖案は一人にて數枚出すも妨なし
一圖案は來月二十日迄ニ當部に送付するものとす
一圖案は鑑査の上最も優等なるものは金五十圓を贈與すべし
一賞金を得たる圖案は必ずしも實地製作に用ゐざるものとす

氣格形相を成るべく森嚴にすべしとの一事は吾人が尤も敬賛する所ろ也、方今有爲の美術家は宜しく大ひに考案すべし、之れ甚だ日本美術に關係する所ならん、故に此の募集の啻に日本美術會にのみ限られたる事、並に來月二十日迄に其答を要するさ云ふ極めて急速なる事、尤も遺憾なり、更めて公衆の答案を殘られんことを希がふ。

○監　獄　則

大ひに改正せられたり、在監の婦女其子を乳養せんと請ふときは其齢滿三才に至る迄之を許す、の條の如き、極めて人情に鑑みて能く監獄の理に適したるものと云ふべし、其他喜ぶべき所ろ甚だ多し。

○新　平　民

平民的の運動大ひに喜こぶべしとせば、新平民の運動は更に尤も喜こぶべし、吾人は嘗し僻多にして極蔑せられたる同胞が漸次に優待せられ、優待せらるゝのみならず益々活潑地に運動するを見て大ひに慶賀す。中外電報に云く、

山城紀伊郡柳原莊の人民は新平民なりとて世間の衛嫌人より輕蔑さるゝを遺憾に思ひ萬望勉强の力を以て智識と財產を養ひ新平民の名をして最も價値あるものならしめんとの熱望にて今回同地の櫻田儀兵衛、玉置嘉之助、寺島佐七、胚瀧庄三郎等の諸氏發企人となり柳原町進取會なるものを起したり

と、吾人更に一快報を添えたり（第百六十五號「新平民」を參看せよ）。

○一夫一婦

一夫一婦制の建白、一と度び東京婦人矯風會南部諸氏の手より發したる以來、神戶に、大坂に、西京に、札幌に、函館に、高知に、千葉に、横濱に、同力賛成の聲響の音に應ずるが如く宵蘇せり、然るに今まや亦た岡山縣の有志者より去五日附を以て同校の建白書を元老院に呈出したり。

○靑山を見るの詩

紅塵萬丈、苦熱如燃、の都門を去りて、靑山一碧、冷風滴柳の新鮮地ニ遊ぶは正に今日の時なり、長野に避暑する美妙君書を寄せて其末に云く、

山におくられて山にむかへらるゝ當地のすがた中々に物珍らしく思はれ候然し吾はでもの事ながら山は矢張り山にて信濃路の山も想像の山もさして異ならざる心地もいたされおしろ人造にてこの家をかく直しこの岩をかく置きかへたらばなど慾のみ出で來て際限もこれなく是のみ今度の旅行中第一に感じて第一に奇なりと思ひし事に候然し乍ら昨夜などは夜色大きに宜しく候ひき久々にてむしれたる如き雲間に月を待、水田に餘光を見るさま之に加ふる虫の聲々近きは朝日山大峯山近くは越後また姨捨の方までもたゞ諸黑き波の空のはてにうねる風情すこぶる奇拔に思はれ候、かく事々しく書かずとも事ながら半碗の汁もわが欲するをまおらするが惜小生が見て面白しさなしたる處のみ一寸如此候御想像によりてこの風情を御鑑被下なば幸に候……

幸わひにして雜紙堆中より夕色靑山を望見せり、嗚呼田舍避暑の樂しみ想ふべき哉。

○熱窓下亦有樂

苦吟の下尙ほ賛美の聲あり、吾人不幸にして避暑の運命に惠まれず且依然として熱窓の下ニ勞すと云へども、然れども亦た自然の樂みとする所なきにあらず、湘煙女史近作病中の吟を寄せて云く、

萬紫千紅火艶嬌、春光無跡夢迢々、病窓亦有歡天地、微雨啼鵑不寂寥。

亦是れ所云一樂にあらずや。

○耶蘇教徒を憫れむ

大同子惻然として悲しみて云ふ、

嗟耶蘇教徒も亦た人の子なり、たとひ宿因拙くして迷ひの夢長なへに醒めず、外道に踏みまごひて正法を毀しる、深き罪業を犯しつゝありとても、吾儕はなかくに渠儕が外道邪見の迷ひ深きが爲に一層の憐れを増さずばあらず、渠儕は邪神を妄信しつらん、そが爲には道德の根原を謬まりつらんと巳むなき勢なれど、こは渠儕が意志の惡きが爲めといはんよりは、渠儕が智識の足らざるに依ること寧ろ多かんめれば、其意志に免じて恕さば恕さなん、有がたき慈悲と云ふべき歟。

○眞實、眞實

自然なる是れ眞實、眞實なる是れ天性に適ふもの也、凡ろ何如なる宗教にてあれ、人間の自然に適せざるものは是れ決して眞實の宗教にあらず。若し夫れ宗教にして社交上の關係より成り立つべきものならしめば、之を一國の習慣、從來の經歷

等によりて可否するは固より當然なり、然れども宗教は是れ人間稟賦の天性に應じ、其の最深最高の衷心に密適すべきものなるが故に、之を政事俗事國事家事に關するが如き凡見よりして評下し來るは大ひなる誤まりなり。人類の衷心は古今東西一轍なり、即ち人間は人間として萬國四海悉く同胞に歸す、故に天下に最も眞なる眞理は唯一つ、最も適するの宗教も亦唯一つなり、彼の耶蘇は西洋人に宜しく、然れども日本人に宜しからずと云ふもの丶如きは、未だ宗教の何者たるを知らざるの人也。吾人豈に生れながらにして耶蘇教家ならんや、初は激烈の反對家、今は熱信なる信徒にてあるのみ、其理他なし此教の能く人間至眞の性情に密適するとを確認したるが故也、凡そ或る宗教の可否善惡を決するは到底此一試驗紙に據の外なし、佛者にして若し眞實に佛教を信じ、眞實に其眞德を發現し、以て佛教によりて始めて能く人間たるを得ることを證すれば可也。吾人不幸にして未だ其實證を見ず、故に之を信奉する能わず。

○西洋婦人無禮多し

斯く慨歎して書を寄せられたるものあり、其言に云く、彼等は集會に臨めば眞先に出んとし、座席なければ男子の立退かんとを待ち、談話するときは服膺なくシヤベランとし、物を持つときは少しの物も男に持ちて貰わんとす、何んぞ其の無禮なるやと。然れども吾人決して之を彼等が無禮なりと思はず。何んとなれば此れ彼等が間だに行はるゝ普通の習慣にして、即はち寧しろ彼等が社會間の俗禮に適ふものたらんがゆへ也。但だ夫れ之を我日本國に於て行ふときは即はち大無禮となるべし、吾人は彼等が日本國に於て其如く勝手なるを許さず、些末も容赦せず、必らずや叱責して許さゞるもの也。願くは西洋婦人に贊成せらるゝ女生徒諸君ゆめ〳〵此の惡習慣に倣ふと勿れ、謙は總べての人の德也、特に優雅なる女性の德也。

○ヘース夫人長逝す

六月二十五日の桑港セ、スチーマーに云く

先の米國大統領ヘース氏の夫人は久しく病床に在りしが遂に昨日午前六時三十分を以て溘然長逝の客となれり夫人が幼名はルーシイ、ウェーアウェ　エツブと呼び千八百三十一年八月廿八日オハヨー洲のチリコースに生れ醫師セームス、ウェツブ氏の末女なり千八百五十二年十二月卅日に於てヘース氏と結婚す後内亂起りて良人ヘース氏の軍に出るや夫人の住居は常に負傷者の病室となれり夫人は良人と共にヴァージニアの陣中に二冬籌を經過し其のサウス、マウンテーンに良人の負傷するや夫人は馳せてミッドルトンに會合し長くフレデリツキ府近傍の病院に在りて良人を介抱せり又夫人がホワイト、ハウスに於ける四年間の生活は能く夫人をして交際家たるの名を博せしめ退隱の後は美以美教會の女子傳道會社の會頭たりし由なり右に付き大統領ハリソン氏夫婦を始め内外諸所より來集する弔詞引きも切らずと云ふ、

吾人亦た一詞を寄せて遙かに之を弔す。

○歐洲の慈善事業

島田三郎氏が毎日新聞に寄せられたる報告中に左の一節あり、生倫敦東部の貧民區を歷見するにバナード氏の孤兒院の如きチヤーリント氏の貧民接待館の如きトインビー館の如き其私業にして人目を驚かす者指屈するに暇あらずマクフエルソン子孤兒院の如きも亦バナード氏の業と同質の者なるか小生親くマクフエルソン子に面して其沿革を尋ねしに此婦人是迄貧民の子弟棄兒を保育して業に就かしめしと五千人其中カナダに殖民せし者最も多し其言に予は一生婚せざるを以て子なしと雖も今五十歳にして五千の子弟あり他日地球一周の旅行を爲さば香港橫濱にも亦予の子弟に逢ふべしといへり其意氣の壯なる與に驚くに堪へ候小生更に其カナダに移る者が耕地を得るは政府の地を與へらるゝにやと問ひしに否一定の通則によりて地を購ふ者にて政府の保護は一錢をも受くるに非らず一切有志慈仁の義捐に成る者なりといへり英人の爲す所は多く此類にて大陸の仕組は之に反し小生ベルリン府孤兒院を一見し其組織を問ひしに府内に五千人の孤兒あり府政府府稅を以て之を保育し之を養ひ之を教ゆ有志の私財を義捐する者は皆府政府に信任し府吏に依賴して此慈惠の業を助くといへり勿論大陸にも私業の存するあり英米にも政府の濟貧局あり然れ共其主として從事する所を觀るに其趣を異にすると大抵此類に御座候。

外　報

○アバルヂーン夫人　英國の女政海に有名なるアバルヂーン夫人は近日愛兒蘭ダブリンに行かるゝよしにて同土民の歡迎準備一方ならず此はアバルヂーン伯が愛兒蘭總督たりしとき夫人の盡力によりて成りたる家内職業協會の年會あるに付ての事なる由にして、而して同會は益す隆盛に趣くと云へり。

○女の惡票　女に惡人あるに付之に政權を與ふ可らずと云へるに對して統計表を

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

擧たるもの〻曰く、一昨々年ボストン府内にて囚われたるもの二萬八千五百十人此中ち女は僅に五千〇八十人、一昨年は囚はれたるもの三萬〇六百八十一人此中ち女僅かに四千九百四十人、昨年中囚られたるもの三萬六千〇〇九人此中ち女僅かに五千五百七十四人なりと、もし我國の統計を擧んには更に之よりも少し。

○印度婦人　印度に於て甞にナチミンの事件あり今又聞くにラクマバイと云へる夫人は其幼少無知の時に結婚せしめられたる良人に同伴するとを不承知し遂に其の賛成助力者の助けを得て近々英國に渡り醫學を研窮して獨立の計を爲すと云ふ凡そ自由の空氣吹入る處ろ必らず騒ぎあり而してのち太陽出づ。

○美男子展覽會　墺都維也納に於ては美男子展覽會の催しある趣きにてその審査官は婦人なるよしなり且褒賞はその第一等の美男子に撰擇せられたる者にあらずんば受領する能はざるよしにてその第一等の美男子と申すは第一上髭の尤も美麗なる事、第二鼻の最大なる事、第三最大なる頭（禿頭にして）を持つ事等なりといふ。（讀賣新聞）

○英國皇女の婚姻　英國女王は皇太子の第三女ルイ内親王のファイフ侯に婚嫁するとを裁可したり。

庀　之

○華族女學校　ユては去る十八日を以て新校開校式及卒業證書授與式を執行せられしが忝じけなくも皇后宮陛下には同校へ行啓あらせられ午前十時式場へ臨御今旨を賜はり校長西村茂樹氏奉答し幹事北澤正誠氏祝文を朗讀し生徒の唱歌洋琴を奏し續て校長は各卒業生及び及第生へ證書を授與し併せて學業優等生へ褒賞を授與し終て學監下田歌子の演說中學全科卒業生井上郁子の謝辭同萬里小路久子の英語謝辭同黒川千春子の佛語の謝辭同三島園子の和文謝辭小學全科卒業生總代柳谷初子の謝辭御用掛川田剛氏の演說等あり右全く畢て陛下には正午十二時十五分還御あらせられたり。

○東京產婆會　東京產婆會は去る十三日午後一時より上野公園内大日本美術會に於て月次甲會を開き講師醫學士濱田玄達氏產婆の爲すべき要務醫學士相磯慥氏會陰の保護醫學士柳琢藏氏畸形骨盤の摸型を示て姙婦診察上の注意を說き古川條道氏石炭の主治効用等各一題を演說談話し會員舘野さゆ子、鈴木まつ子、長野てい子、服部かう子の實驗上に係る談話等あり午後六時散會せられたり偖ほ聞く處に因れば當日出席會員は百五十餘名ありと云ふ。

○癩瘋微院　吉原驅黴院は獨立後新築に着手せしが工事意外に捗取り來月中旬には落成の見込みなり娼妓の患者は意外に多く一昨日の現在數は百四十二名に及びたり之れに反し洲崎の方は風土の良りたる故にや患者至つて少く目下は僅かに四十餘名の入院者あるのみにて貝樓主等の驚ふる所は娼妓の逃亡にあるより今度更に其筋へ出願し數名の巡査を拜借して院の内外を取締る事となれり。

○驅黴院事務掛　今度驅黴院を設きたるに付其の事務掛は貸座敷取締へ命ぜられたるもの何分一人にては不行屆となるの恐ありとて副取締をも事務掛中へ加へたしと一昨日吉原洲崎兩遊廓より其筋へ出願せり

○證書授與式　麻布永坂町香蘭女學校に於ては去十五日學科昇級の證書授與式あり、麻布新堀町の普通士女學校に於ても同日同樣の式あり、横濱のエリス女學校に於ては去九日全科卒業長谷川みね子の卒業證書授與式あり、明治女學校に於ては去十六日全科卒業生久野しげ子、漢學卒業生太田きん、吉田ちよ、三輪貞、石川ろく、長島仲、安藤稚、松井まん七子の卒業證書授與式ありき。

○宮城女學校獻堂式　仙臺市東三番町に今度建設したる宮城女學校は去る五日其獻堂式を施行し午前十時來賓一同を式場に請し校生一同の唱歌次に非深梶之助氏の新禱及演說次に植村正久氏の演說次にスチートル氏の英語演說次に同校長ブールボール女史の演說等あり來賓に饗饌を饗したり此の壯大なる校舍は米國デュー、アイ、ワンドルと云へる婦人が最愛の男女子二人まで夭折したるにぞ婦人は二子の教育費に充てたる金を悉く同校に寄附したるに依り之を建設するに至りしものなりと云ふ。

○大坂婦人慈善會、名護町の貧民　先頃博物場内に開きたる大坂婦人慈善會にては其賣上金及び諸方より寄贈の寄金とを以て白米を買入れ四區及び東、西成兩郡内の貧民へ一人前二升五合宛夫々施與したるよし尤も名にし負ふ彼の名護町の貧民は貧乏を以て常とし觀然自甘する程のものなれば救助するも却て怠惰に誘導するの恐あればとて調査の依賴を受けたる南區役所にては右等の貧民を除き其他に就き嚴重の取調を遂げ十五戸四十六名は眞實正銘の貧乏人なる趣を慈善會へ報告したれば名護町の貧民は終に件の施米を受くる能はざるより皆に喫ち居る者もありしといふ（七月一日時事新報）。

○美術學校と音樂學校　兼て風說ありし如く此程東京教育博物館は高等師範學校の附屬となりたるを以て同館屬林吉一氏と文部屬直村典氏とが目下專ら殘務取調に從事し居るが陳列品中高等師範學校と帝國博物館とへ引渡すべき分類整頓の上は同館の建物は悉皆東京美術學校へ引渡す由又東京音樂學校は上野なる華族會館の隣地なるが今度公園地取擴けの爲め引拂はざるを得ざるに付元教育博物館の構内なる北の方へ同校を建築する筈にて目下地均中なりと云ふ。

廣告

女生徒募集公告

本校ハ九月十六日始業豫科一年生ヨリ各級入學ヲ許ス志願者ハ入舍學共九月十日迄ニ申込ベシ十二日ヨリ三日間入學試驗ヲ執行規則書ハ郵券二錢ニテ送付ス

明治二十二年七月

京都市今出川通寺町西入

同志社女學校

●女學雜誌殘本大安賣

是迄本誌一號より百號に至る百冊を金壹圓に低減し賣却致し來候處追々欠號を生じ既に百冊の内四十餘冊の欠本と相成候に付き更に**殘本五拾册餘を金三拾錢**賣價を減じにて賣拂ひ可申候

但し府外は通運先拂ひにて御届可申上候

●通信女學講義錄

殘本安賣

通信女學講義錄は一冊大抵六七十枚づゝあり母親又は妻君が家に在りて女學の一と通りを學ぶの工夫なれば二三年の後は和學、理學、地理、歷史、及び子育法、女子生理、家内理學、經濟學などの一班を居ながら學び得べき方法あり一冊代價二拾錢の處大勉强一冊拾錢郵送**即ち十五册**自一卷至十五**代金**料二錢に其定價を減じ**壹圓五拾錢郵送料三拾錢**にて賣拂ひ申すべし

京橋區日吉町八番地

女學雜誌社

交詢案内

（備但[illegible]郵券十[illegible]委細[illegible]）

●雇ひたき方（甲）

十二	下婢	年齢廿歳か五十歳迄の基督信者を雇入度者[illegible]
十五	召使	家内の手助けとなり小兒の世話をすべき年[illegible]を[illegible]たし尤も讀書算筆を學びたき志あるものを望む
十六	召使	重に小供の世話及裁縫[illegible]年少の女子を雇ひたき所あり[illegible]
二〇	取締	基督教信徒にて年齢三[illegible]學校ニ寄宿し寄宿生徒の世話[illegible]入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者
二一	中働	年齢廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり

●雇はれたき方（乙）

六	奉公	地方師範學校卒業生にて學費に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし
七	裁縫	年齢廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのこと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し
十三	教師	栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む
一九	召使	裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし
二四	奉公	年齢廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇はれたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齢二十二才）産婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に産婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齢十四歳にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
三〇	通辨	年齢廿四歳にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり
三一	奉公	廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家内の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり
三二	奉公	年齢十二才にてキリスト信者の家に小間使又は兒守りに雇はれ度者あり夜分には夜學校等にて教授を受け候と出來候はゞ給料は申受けず
三三	裁縫	年齢三十六才にて裁縫の教師又は裁縫致し候處に雇はれたく但し先方に止宿を願たし

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

同志社大學義捐金の第二回募集取扱廣告

同志社大學義捐金

取扱期限は四月限りの處地方有志者にして當時募集中のものも有之趣に付き更に五月より十一月まで第二回募集取扱期限とし引續き取扱候間右大學設立賛成の諸君は多少に拘はらず金圓相添へ左の各社へ御申込被下度候

一金圓御寄贈の向は之を各社の紙上に其金高並姓名を掲載し別に受領證を差出さず

一義捐は拾錢以上に限る

一第二回期限は本年十一月卅日を以て締切とす

報知聞社　毎日新聞社　朝野新聞社　東京公論社　東京新報社　改進新聞社　東京朝日新聞社　江戸新聞社　嚶鳴社　警醒社　經濟雑誌社

女學雑誌社　民友社　大坂朝日新聞社　大坂毎日新聞社　東雲新聞社　大坂公論社　京都中外電報社　日出新聞社　京都日報社　神戸又新日報社

發兌

七月。六日　十三日　二十日　廿七日
八月。三日　十日　十七日　廿四日　卅一日
九月。七日　十四日　廿一日　廿八日
十月。五日　十二日　十九日　廿六日

定價

一册。六錢　郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。五十八錢郵税。十錢（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但〻紙面半頁分の廣告を載する毎に右雑誌十部の注文を要〻以上半頁分毎に十部増の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但〻不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雑誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町巖々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町亘明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雑誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

明治二十二年七月十八日印刷
明治二十二年七月二十日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雑誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐